

あ。う。る

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話20

日本で電信の供用が始まったのは
明治二年の東京〜横浜間。
電話は明治二十三年。
では北海道にはいつ頃から
登場したのだろう…

電信化の動き

明治二（一八六九）年、島義勇が札幌本府を開くと、道路も海岸から内陸に向かって進み始め、人々は次第に奥地に入るようになった。そうなるに緊急連絡をどうするかということが問題になってきた。人や馬では間に合わない。そこで東京〜札幌間を電信線で結ぼうと考えた。さっそく函館の開拓使出張所が計画書を作り、当時開拓使次官だった黒田清隆のいる東京の開拓使庁へ届けた。

「今、本州の電信線は盛岡付近まで延びており、青森まで至る日もそう遠くありません。青森〜函館の間は海底線で結べばすぐ北海道へ参ります。現在工事中の札幌本道に沿って行き、森〜室蘭の間は噴火湾に沿い、長万部を通って札幌まで敷けばよいと思います」

電報の使用開始

明治五（一八七二）年、一〇人ほどの電信関係機械技師や測量技師がやって来て、建設に取り掛かった。

二年後の明治七年、函館〜室蘭〜苫小牧〜札幌〜小樽というルートで電信線が完成。津軽海峡の海底線も同じ頃工事が終わり、明治八年三月二十日には、一般電報の取り扱いが道内でスタートした。札幌から長崎（長崎は明治四年にロシアのウラジオストックと海底ケーブルが結ばれていた）までの電信線も繋がり、海外との通信も可能になった。それまで飛脚を使っても東京

札幌間は一月を要する時代だったが、
ら、電信線の開通は北海道の開拓に大いに
貢献した。



函館・亀田橋付近の電信線架設の様子（北海道大学附属図書館所蔵）

馬車や蒸気じゃ 便りが遅い
かけておくれよ テレグラフ
海山へだてて 暮らしていても
心は切れない テレグラフ
開拓者の間ではこんな歌が歌われていた
という。テレグラフとは「テレグラフ」、つ
まり電報である。
最初の頃の電報料金は、札幌と東京間が
二〇字まで四五銭。現在の物価に置き換え
るなら二万円といったところか。かなり高
額であった。

電話の実用化

電信に比べ、電話のほうは大きく遅れて
のスタートだった。明治二十三（一八九〇）
年に東京と横浜で電話交換業務が始まら
れたが、札幌ではさらに十年遅れての開始
であった。しかし、これが北海道の電話の
ルーツではない。明治十六（一八八三）年、

札幌と幌内間に鉄道電話が開通しているか
ら、こちらが第一号である。

このようないわゆる私設電話の中に、明
治二十八（一九〇五）年、なんと、浜益の漁
場で設置されたものがある。当時、浜益な
どの日本海沿岸はニシン漁で栄えた場所
であった。そこでニシンの群来を各漁場に
知らせたり、漁業組合から気象情報を知ら
せたりするために電話を使うことにした。
「工事内容は漁業組合事務所を中心として、
北は雄冬、南は濃唇まで。その間に群別
幌、タンバツケ、雄冬、毘砂別、アイカッ
プ、送毛の七カ所に電話所を設置。工事
費四五六〇円余を投じ、明治二十八年九月
完成したものであった」（『浜益村小史』）。
電話をこのように民間で使ったのは、国
内初であった。昭和五十三（一九七八）年、
道内の電話自動化最後の地となった雄冬
が、皮肉なことに北海道における民間電話
利用の第一号だったのだ。

函館が加入数ナンバーワン

明治三十三（一九〇〇）年、札幌・小
樽・函館の順に電話交換が開始された。そ
の頃の加入数は、
札幌一四一、小
樽二五七、函館
三二〇。登記料が
一五円、電話機の
付加使用料が年間
一八円、公衆電話
は一回五分で一五
銭だった。当時、



デルビル磁石式壁掛け電話機。北海道の電話
創業期に使用された（通信総合博物館所蔵）

もりそば一枚二銭の時代である。こんなに
高いのでは、庶民が使うのは到底無理で、
金持ちだけが電話の使用を申し込んだ。つ
まり都市別加入数は、そのまま金持ちの数
を表しており、函館・小樽には大商人がい
て大きな富を築いていたのである。人口の
面でも札幌がこの二つの都市を追い越すの
は戦後になってからだった。

自動化の最初は旭川

電話が交換方式からダイヤルを回せば直
接相手に繋がる自動化方式になったのは昭
和六年。意外なことに旭川が最初だ。これ
は当初の予定にない自動化であった。昭和
三年に旭川電話局が火事になり、交換機も
すべて灰になってしまった。さっそく復旧
工事が行われたが、折から東京など中央で
は自動交換ブーム。ついでに旭川も自動化
しようということになった。しかも、先に
取り付けた諸都市は輸入機であったが、旭
川には国産の交換機が日本で初めて取り付
けられた。札幌の自動化は旭川から二十年
も遅れた昭和二十五年、小樽は三十一年、
函館は三十三年にようやく実現された。

あつろの杜

エコ・ネットワーカー代表・酪農学園大学教授
小川 巖さん

Interview

「北海道の人に自然のありがたさ分かってもらうにはどうしたらいいかを、ずっと考えてきました」という小川巖さん。今回は「フットパス」の普及に取り組む小川さんのお話です。

松前・横須賀・札幌

生まれは松前です。母親が神奈川県から父の実家のある松前に疎開していたんですよ。二年で横須賀に戻ったので、松前生まれの横須賀育ちというのが正確なところですよ。再び北海道に来たのは一九七〇年。信州大学を卒業してから北海道大学の大学院に来て、鳥の種間関係を研究していました。北海道農業研究センターの中が僕のフィールドでした。そこでモズとそれによく似たアカモズを調べていたんです。

エコ・ネットワーク

エコ・ネットワークを創ったのは一九九二年。それ以前に、市民に自然に親しんでもらい、その大切さを知ってもらう活動をやるついでに脱サラした四人が集まって野生生物情報センターという民間団体を創設し、八年続けました。僕は道庁にいて脱サラしたんですが、役人を辞めるときは、変人扱い。あの頃そういうことは役所がやるものだ

いま、フットパスに燃えている...



小川 巖
おがわ いわお

1945年生まれ。信州大学農学部卒業後、北海道大学大学院農学研究科博士課程単位取得。北海道生活環境部に勤務の後、84年野生生物情報センター設立。92年環境市民団体エコ・ネットワーク代表。環境をテーマに市民と共働して活動を続ける。09年酪農学園大学教授就任。鳥類の生態・行動だけではなく、環境修復の観点から野生動物の事故未然防止策などをテーマとする。また地域に根ざした環境ボランティアをもうひとつの柱に位置づけている。現在、地域活性化に寄与することが期待される「フットパス」の実態調査と普及に向けた研究に取り組んでいる。



と思われていた。ですから僕が辞めたとき、「野生生物情報センターを立ち上げる」という記事が北海道新聞に写真入りで載りましたよ。まだ、そんな時代でしたね。

活動しているうちに、自分は花をやりたいとか、私はこういうのを出てきて、まとまりにくい状況が見えてきた。それなら、みんな好きなことをやればいいんじゃないか、ということと解散宣言をしました。

僕は自然系と環境系の融和とでもいうのかな、野生生物だけじゃなくて、環境との関係をやっていききたいな、という思いがあった。

まだまだ手つかずの分野をエコ・ネットワークで取り組もうと考えました。例えば、怪我をした生き物を収容して、最終的に野生に復帰させるアニマルレスキュー。この組織の立ち上げに、ずいぶん力を入れてやって来ました。そここうしているうちに、事故が起きないよう、未然防止も併せてやらなきゃいけないだろうと。あと外来動物の問題もある。

フットパス

フットパスに注目したのは一〇年前ですね。そういうのが北海道にあつたら、ピタリじゃないか

と思い、組織化を図って盛り上げて来ました。

イギリスはもう二〇〇年ぐらい前からああいうことをやっている。日本とは全く違います。向こうは「私有地でも歩く権利がある」という法律まであります。「歩く権利法」という法律まであります。それを日本に持ち込んで真似しようとしてもできない相談で、日本は日本流のそういうものを目指す。

北海道は国内でも断トツですよ。特に道東のほうでは一気に一〇〇キロ、二〇〇キロの道を造るというロングトレイルの流れが出て来た。一つの町に複数のコースがあれば、それを隣の町に繋げて、隣の町がさらに次に繋げていけば、ロングトレイルが一気にできてしまう。今まで地道にやって来たところをロングトレイル化するということも考えられる。

もう一つは、札幌のような大都市にも、アーバンフットパスといつたらいいのかな、歩いて楽しめる所がたくさんあるんですよ。既に北区のほうでは、そういう取り組みが始まっています。

フットパスには三つの原則があります。まず、地元でフットパスに関わるグループや人がいるということ。二つ目はマップがあること。そして三つ目は、コースに道

標あるいはコースサインが矢印だけでなくいいからあること。この三つを揃えているのが本当の意味でのフットパスで、これから我々が創ったフットパスネットワークで、認定していくという方向にいくんじゃないかと思っています。

歩くのはトレンド

フットパスを歩くのは、万人ができる非常に手軽なアウトドアアクティビティなんです。歩きながら、生き物にも触れるし、歴史的・文化的な物、お地蔵さんや石碑、古い建物にも触れる。そういうことを構えずにできるのが、フットパスのいい点だと思っんです。農村地帯に行くのと特にそういうことがいえます。フットパスを歩いた後に農業体験をやるとかね。「歩くだけで帰るのはもったいないから、こんなことをやって行かないか？」というふうな呼びかけをすると、「面白そうだ」となる。そうすると、遠い存在だった農業というものが身近に感じられるきっかけになりますよね。フットパスは呼び込みの材料にもなるんですよ。

僕は歩くのはブームというよりトレンドだと思っている。やっぱり健康のことを考える人たちも多いうわけですから、間違いなくそういう方向にいくと思います。

時代劇のセリフは、ほとんどが架空の言葉遣いです。

江戸時代の町人や町娘がどのように話していたか、現代にはほとんど伝わっていません。侍が自分をどう称していたのかすら、よく分かっていないのです。

「拙者」は、改まった態度で使う言葉なので、奥方には使わなかったでしょう。では「身共」なのか「小生」なのか？「元禄時代の侍の日記」には、自分のこととして「予」と書かれています。しかしこれは書き言葉ですから、会話の時に「予」を使っていたとは思えません。

そうなのです。自分を指し示す言葉一つとっても、江戸時代にどう言っていたかはよく分からないのです。そこで時代劇では、何となくチャンネルのムードが出る言葉を、登場人物に喋らせているのです。

『大菩薩峠』の机竜之介は、自分のことを「わし」と言います。侍相手に話す時は「拙者」です。眠狂四郎は、誰と話す時も「わたし」と言っています。自嘲的になった時だけ「おれ」です。

『竜馬がゆく』の坂本竜馬は主に「おれ」と言い、西郷隆盛のような、同格の他藩の人間と話す時のみ「わし」と言います。「木枯らし紋次郎」は「あつし」には関わりのないことをご存じです。

実際にそう話していたとはとても思えません。そうです。チャンネル言葉は創作した言葉なのです。

「卒爾ながらお尋ねいたす」「はて面妖な」「ふっ、ふっ、ふっ。おぬしも悪よのう」「遠慮致さずとも良い。もそとと近う寄れ」「いってことよ、おみつ坊」「マの向こう傷を何と見る」「曲者だ。出会え、出会え」

これらはみんな、江戸の雰囲気を出すための架空の言い回しです。正しい侍言葉は調べきれないし、調べて正しく書いたならば、きつとムードが出ないでしょう。

「こたび」は普通に「このたび」と言っていたはずです。しかし、「こたび」のほうがムードは出ます。それ故、チャンネル言葉はこのままでいいのだけれど。

O W L I N F O R M A T I O N

エコツーリズムを体感する2日間

第18回全道フットパスの集い in かみふらの

9月7日(土)・8日(日)
土の博物館「土の館」(上富良野町西2線北25号)ほか
主催/第18回全道フットパスの集いinかみふらの実行委員会
(TEL 0167-45-6030/FAX 0167-45-2656 佐川建設内)

全道フットパスの集いは、2003年から続くフットパスの大規模イベント。上富良野町での開催は2回目で、会期中にはサミットやフットパスウォークなどが行われます。

1日目には「多田農園パス」(8.5km)、2日目は「らくらくパス」(5km)または「千望峠パス」(10km)のどちらかのパスを体験。千望峠パスは「ほっかいどう 100の道」にも選ばれており、丘に広がる畑や大雪山系の山並みが一望できる美しい景観を楽しむことができます。

また、初日には北海道遺産「土の館」でフットパスサミットと交流会を開催。「あうるの杜」登場の小川巖さんをコーディネーターに、地元町村の代表がフットパスによる地域の活性化を話し合います。

詳細は同実行委員会エコ・ネットワーク(TEL 011-737-7841)まで。申し込み締切は8月24日。



心に残る「小さな出来ごと」募集中

「心に響く…北のエピソード100選」

2013年8月31日(土)応募締切
主催/心に響く…北のエピソード実行委員会(札幌市中央区南8条西6丁目
イト会館1F北海道印刷工業組合内 TEL 011-562-6070)

「心に響く…北のエピソード」実行委員会では、「感動」「教訓」をキーワードに、北海道で体験した小さな出来事を募集しています。今年で第5回となる同事業は、表現力の豊かな日本語による、道民文化の質的向上を願って企画されたもの。受賞・入選作は「100選」として作品集にまとめられ、発行されます。回を重ねるごとに広がりみせ、昨年は過去最多の634点の作品が集まりました。応募は北海道在住の方に限り、一般部門のほか「高校生」「中学生」「小学生」の学生3部門を加えた4部門で募集。応募者自身が体験した未発表の出来事を800~1,000字程度にまとめ、応募用紙とともに8月31日必着で実行委員会宛てに送付すること。応募は1人1作品まで。

最優秀賞には30万円、学生各部門優秀賞には3万円相当の図書カードを副賞として進呈。詳細は北海道印刷工業組合ホームページhttp://www.print.or.jpまで。



応募要項・応募用紙は北海道印刷工業組合ホームページ「イベント情報」からダウンロード可能

姉妹都市韓国テジョンとの音楽交流

札幌&韓国テジョン・フィル 姉妹都市オーケストラ交流事業

第561回札幌交響楽団定期演奏会
8月30日(金)19:00、31日(土)15:00 チケット(1回券)3,000円~5,000円
札幌コンサートホールKitara 大ホール(札幌市中央区中島公園1-15)
主催/札幌交響楽団(事務局 TEL 011-520-1771)

北海道唯一のプロ・オーケストラである札幌交響楽団は、創立以来、年10回の定期演奏会を主軸に、特別演奏会や道内各都市での公演など、幅広い活動を続けています。

8月の定期演奏会では、札幌市の姉妹都市・韓国テジョン広域市を拠点とするテジョン・フィルハーモニック管弦楽団の芸術監督、グム・ノサンを初めて招聘。韓国の若手人気ピアニスト、イム・ドンヒョクとの協演が注目されるベートーヴェン「ピアノ協奏曲第3番」、札幌では20年ぶりに演奏されるマーラー「巨人」と、グム・ノサンの表現力を生かすプログラムとなっています。

また札幌では、複数の定期演奏会を同じ席でお得に楽しめる「定期会員制度」を用意。募集中の後期シーズン会員は、10月から来年3月までの5回が対象で、主催演奏会のほか提携店での割引特典も受けられます。



指揮/グム・ノサン 韓国テジョン・フィルの芸術監督兼首席指揮者。2012年にはヨーロッパツアーを成功させるなど、音楽を通じた国際交流を積極的に推進している

おすすめ本

金融経済と証券投資

入門から使える標準理論まで

玉山和夫・著
中西出版
定価3,000円(税込)
A5判、350頁
2013年4月
刊行



新聞の経済面が分かる金融・投資の実用書
金融・投資の入門から標準理論までを平易に解説した実用書。金融の位置づけに始まり、投資理論の基礎と応用、国際経済の出来事と、段階を踏む構成で理解が進みます。

北海道内の出版社・雑誌社の新たな取り組み

一般社団法人北海道デジタル出版推進協会が発足

北海道内の出版社・雑誌社が集まり、6月11日に「一般社団法人北海道デジタル出版推進協会」を発足しました。

地域コンテンツの電子化を推進し、図書館など公共機関への提供や一般電子書店への配信の窓口とします。電子書籍制作支援や普及啓発などに努める予定。電子化による新たな読者や作家の開拓、良書の再発見等に繋がることが期待されます。



2年振りに「東京国際ブックフェア」を視察してきました。「電子書籍元年」と言われた当時の熱気とは多少異なる「出版業界」としての動きを感じました。背景のひとつには、ついに果たされた海外勢の日本市場参入の影響があると思います。株KADOKAWAの角川会長が基調講演で、具体例を示し「出版業界のイノベーション」の必要性を熱く語っていたことが印象的でした。また日本でも「セルフ・パブリッシング(「自費出版」ではなく「自己出版」)」の成功例が目に登場し、複数の出版社から「デジタル・ファースト(初めに電子版を発刊)」への取り組み事例が紹介されていたことに、この2年という時間の経過を感じました。(Y)

発行・編集/中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-14
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
発行責任者/林下英二
発行日/2013年8月1日



http://nakanishi-shuppan.co.jp